

小松市立博物館

小松の文化ゾーンの中心、^{ろじょう}芦城公園内に位置し、石川県では第一号の登録博物館として昭和33年に開館。歴史・美術等の人文資料、および化石、昆虫標本、剥製などの自然科学資料を併せ、重要文化財・重要有形民俗文化財を含む5万点あまりの収蔵資料数を誇る、県内唯一の総合博物館です。

昭和20年代後半、およそ「博物館・美術館」という言葉もまだ聞き慣れない時代。市内の商店主、職人、教師、新聞記者などさまざまな方面の人々が図書館の一室に集まり、ふるさとはにかかわるものを持ち寄ってはサロンを開いていました。そのコレクションが非常にすぐれたものであったため、市民はもとより、関係学会や日本博物館協会からも「博物館」設置を要望する運動が起こり、県内で最初の博物館として出発するに至ったのです。

さて、このような成り立ちの博物館ですから、小松はもとより、広く加賀地域から様々なものが寄せられ、その範囲も多岐にわたっています。一億年以上前の手取層群の化石から現代の人間国宝による美術品までが一堂に収蔵・展示されています。この幅の広さは東京国立博物館+国立科学博物館に匹敵すると言っても過言ではありません。プリマティブな意味で、とても博物館的な博物館といえるでしょう。

小松という所は、その語源が「高麗の津(みなとの意)か?」、ともいわれて久しく、古来から、物流の拠点であり、窯業・製鉄業が盛んな土地柄でした。その歴史は、紀元前数千年前にまで遡ることができます。また、一向一揆の時代から、いわゆる真宗王国の一角を占めてきました。江戸時代初期、前田利常が小松を隠居城として定め、産業革新をおこない、連歌をはじめとする文学や茶道・華道など諸芸の移入を行ったこ

とで、小松の文化風土が成熟し現代に繋がっています。今に連綿と受け継がれる「お旅まつり」の曳山、そこで上演される子供歌舞伎は、当時の名残、工芸と諸芸の総合芸術といえるでしょう。このような文化的土壌を背景に工芸や産業も進展、藩政期から明治・大正にかけて、盛んに金工が行われ、滝本寅松(鑿金)、秋山喜平(蝋型)、藤本政吉(合金)、魚住安太郎・初代為楽(砂張)、永田庄次郎(打出)、岩井 徳(薄金細工、鉄打出)らが輩出、多くの秀作が残されています。

実は、今秋11月1日をもって、本館は開館50年を迎えます。こうした先人が残した作品を含め、過去から託された多くの資料を未来の人々にひもといてゆることが出来るよう、今を大切に紡いでゆきたいと考えています。

小松市立博物館学芸員 坂下雅子

小松市立博物館開館五十周年記念

特別展 九谷再興の陶工「粟生屋源右衛門」

粟生屋の作品と、粟生屋源右衛門が関わった諸窯を紹介します。

^{あおや}粟生屋は、江戸後期に加賀本藩若杉窯(古九谷釉薬研究)~大聖寺藩内吉田屋窯~小松町に戻り楽焼(小松焼・粟生屋焼)~蓮代寺窯・松山窯で青九谷~幕末・明治の名工庄三らを育て、初代徳田八十吉など古九谷様式・吉田屋様式の作家につながるキーパーソンです。

会場 小松市立博物館・小松市立錦窯展示館

会期 11月24日(振休)まで開催中

入館料 一般 500円 高校生以下、65歳以上の方は無料

第1会場 小松市立博物館 粟生屋と「東郊」

硯箱・文庫・筆筒・炉縁・燭台・卓・炉台他いわゆる小松焼・粟生屋焼(窯)といわれてきた陶胎の上に白化粧をし、透明釉をかけ、上絵の具の諸色(緑・黄・紫・青)で文様を施した楽陶を中心に紹介。

第2会場 小松市立錦窯展示館 粟生屋源右衛門と再興九谷諸窯
粟生屋源右衛門が関わった諸窯(若杉窯・小野窯・吉田屋窯・蓮代寺窯・松山窯)の紹介。



小松市丸の内公園町19番地 芦城公園内

TEL：0761-22-0714 FAX：0761-21-7683

開館時間 午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

休館日 毎週月曜日、国民の祝日の翌日、年末年始（12月29日～1月3日まで）

※その他、展示替等に伴い臨時休館することもありますのでお問い合わせ下さい

入館料 博物館：一般300円 団体250円（20名以上）

共通券：一般500円 団体400円（20名以上）

（本陣記念美術館、宮本三郎美術館、錦窯展示館のうち1館との共通券）

※高校生以下及び満65歳以上の方は無料 ※特別展開催中は入館料が変更される場合があります

<http://www.tvk.ne.jp/kcm>



「唐金龍刻香炉」 滝本寅松

屋号を鍋屋又は清水屋といい、祖先は八幡村の清水山に住んで、鋳物も業としたが、後、現在の清水町に移り、鋳物釜を築いた。

先祖次右衛門(1764～1771)は、特に技がすぐれ、京都の高辻少縮言の御用を承り、「石見守」の呼名を賜っている。

本作品の作者寅松はその後裔で、明治元年(1868)の生まれ。寺町に居住し、鑿金・蠟型に優れ、多芸の鋳物師であった。昭和4年(1929)東京に移住し、同7年7月7日、65歳で歿す。

本作品は、胴まわりに雲の中から見え隠れする龍の勇姿を鑿金で見事に浮き出している。蓋には「福」の文字が透かし彫りされ、底面に「滝本石見作」の銘を入れる。



「柴牛香炉」 (在銘) 秋山喜平

小松市材木町の人で、明治時代に活躍した名匠である。蠟型作品の名工として知られ、作品には置物・香炉・花器など種類も多く、特に柴牛に見られるように動物を得意とした。

本作品は、数十ある柴牛の中でも作品の出来ばえといい、大きさといい、最高の傑作ということが出来る。柴の裏面に「稚山製」の銘がある。



「砂張銅鑼」 銘青海波

魚住安太郎（初代為楽）一尺八寸

魚住為楽は、本名を安太郎、号を為楽と称する。明治19年、小松市大文字町の桶職魚住伊之松の長男として生まれた。少年時代に大阪に出て、仏具製造に従事、後に銅鑼製作に精魂を傾けた。気に入らない仕事は決してしないという職人気質に徹したきびしい製作態度であったため、その作品は少ない。昭和30年に、その技法が重要無形文化財に指定、昭和39年、78歳で歿している。

本作品は、益田鈍翁の依頼により製作されたもの。益田鈍翁は、明治・大正・昭和にかけての我が国財界の大立物であり、美術愛好家として、また茶人として有名である。直径1尺8寸もの大作は、彼の生存中2点しか存在せず、その内の1点が本作品である。もう1点は、今日庵(裏千家)にあり銘は「雲ノ井」。